

種別	有形文化財(歴史資料)
名称	朴沢学園裁縫学習資料
ふりがな	ほうざわがくえんさいほうがくしゅうしりょう
員数	3,956点
時代	近代(明治10年代～昭和30年代)
所在地	仙台市青葉区川平二丁目26-1
所有者(占有者)	学校法人朴沢学園
性質・形状 大きさ 重量・構造	布製, 紙製ほか 一部未完成品有り 詳細は別添目録のとおり
現状	学校法人朴沢学園で一括保管
由来・証拠・伝説 又は作者と伝来	<p>朴沢学園の前身は、明治12年(1879)朴澤三代治(ほうざわみよじ)が女子の裁縫学校として、良覚院丁一番地(現青葉区一番町二丁目)に開設した松操私塾(しょうそうしじゅく)である。松操私塾は県内のみならず全国に裁縫教員として活躍する卒業生を輩出し、明治14年創立の和洋裁縫伝習所(現東京家政大学)と並び、裁縫教育の双璧として高く評価されている。同校では、松操学校、朴澤松操学校と名前を変えながら三代治の裁縫教育を伝えてきた。</p> <p>本資料群を構成する資料は、明治10年代から昭和30年代に同学園に在籍した生徒が裁縫の技法を履修する過程で製作し、卒業後も各自で保管していたものである。昭和34年(1959)の同校の創立80周年や平成21年(2009)の創立130周年等を機に、生徒自身やその親族から同校に寄贈されて、生徒54名分、約4,000点のコレクションとなった。</p>
説明	<p>本資料群は、裁縫技法を履修する学習者が授業等を通じて製作した資料によるコレクションである。裁縫の基礎的な技法から、これを応用して衣服や装飾品等を製作するに至る、技術習得の過程を示す資料を中心に構成されており、概ね学習の段階別に①から⑧に分類することができる。</p> <p>①大分類1「基礎縫」は、直線縫、糸留めといった技法を練習したものであり、学習の最初の段階として基礎技法を重視したことを伝える。②大分類2「部分縫」は、袖や袴の腰板部分など、衣服等で特に技術を要する部分を抜き出して、集中的にそれを学んだものである。③大分類3「罫引・裁切」は、紙に布の裁ち方や縫い合わせ方等を図示したもの、裁断したもの、組み合わせたものであり、合理的かつ経済的に衣服等の成形を理解することが図られている。罫引や裁切は、数量が多く、バリエーションも豊かであり、最も重視されていた段階であることがわかる。また、④大分類4「型紙」は、布地を必要な形に裁断するために型として用いる紙であり、和装と洋装が混在していた時代をよく示している。これらの過程を経て、⑤大分類5「裁縫雛形」としてミニチュアサイズで、⑥大分類6「実地裁縫」として着用に耐えうるサイズで、それぞれ衣服等の製作に至っている。⑦大分類7「手芸」は、被り物や巾着などの小物類や衣服等の装飾部分、編物の各種技法等を学び製作したものである。</p> <p>⑧大分類8「その他」として、裁縫に必要な用具や、同時に学んだ礼法に関する資料などもコレクションに含まれており、当時の裁縫教育の様相を伝えている。</p> <p>以上の分類を可能とする本資料群は、明治期から昭和初期にかけて在籍した生徒一人ひとりの裁縫学習資料の集積であり、各時代の裁縫技術の習得過程を各段階の成果物によって具体的にたどることができると同時に、資料群を総合的にみることによって、裁縫教育の先駆的役割を果たした朴澤三代治に始まる同学園の教育の特徴を知ることができる。近代日本の裁縫教育の実態を具体的かつ詳細に示すものと評価され、重要である。</p>
備考	<p>本資料群は、仙台市指定有形文化財(歴史資料)「朴沢学園裁縫教育資料」(平成23年指定)と作製主体・使用意図・伝来過程等が異なっていることから、独立した資料群として評価する。</p> <p>【参考文献】 仙台市教育委員会編、2018年、『仙台市文化財調査報告書第472集 朴沢学園裁縫教育資料調査報告書』 学校法人朴沢学園、2012年、『朴沢学園裁縫教育資料集 第一集』 学校法人朴沢学園、2014年、『朴沢学園裁縫教育資料集 第二集』</p>

※目録は本審議会では配布しません。